

開催地名：東京都大島町	
開催日時	令和3年11月7日（日） 19:00～20:30
開催場所	大島町開発総合センター
語り部	宮本英一（千葉県旭市）
参加者	各地区自主防災組織、関係機関等 100人
開催経緯	<p>多数の犠牲者を出した平成25年の伊豆大島土砂災害より7年が経ち、避難情報を発令しても、避難者は年々減少し、避難に対する意識は低下していると考えられる。</p> <p>また、地域コミュニティが希薄化するなか、自主防活動は一向に活発にならない状況である。しかも、避難所では新型コロナウイルス感染症対応も必須で、マンパワーが不足することは明らかである。このため、早急に住民の自助、共助、避難に対する意識向上を目指す必要がある。</p>
内容	<p>(1) 災害に対する警戒が薄かった千葉県旭市</p> <p>私の住んでいる千葉県旭市は比較的災害の少ない土地だ。江戸時代に津波の被害を受けた経験はあるが、古文書に残されているだけで町民に伝えられることはなかった。津波に対してなんの警戒もなく日常を過ごしていた市民が突然被災したのである。旭市は九十九里浜の東の端に位置し、比較的平坦な土地。東日本大震災の当時、私は旭市内の地区の区長をしていた。</p> <p>(2) 東日本大震災当時の様子</p> <p>震災発生時、旭市の広い範囲が震度5強の地震に襲われ、津波が繰り返り起こった。千葉県の防災管理協会によると津波の高さは7.6mにも及んだ形跡があったという。家屋が流されてしまった人もおり、多くの人が一時避難所に避難した。津波による建物の倒壊や道路の封鎖、文化財への被害なども甚大だった。多くの方は一度目の津波で避難をしたが「もう大丈夫だろう」と家に戻り、二度目の津波に流されてしまった。私自身、地震の瞬間は車に乗っており、揺れが落ち着いたころには自宅にいた。家から海が見えるが、特に避難はせず「家の前の堤防を越えることはないだろう」と思っていた。津波警報は鳴っていたが、道路を片づけたりして過ごしていた。1度目の津波から約1時間後、大きな津波が発生した。避難しようとしたが、当時86歳だった母親の姿が見えずに探していると、私たちの所まで津波がやってきて、激しい水の流れに飲まれてしまった。かろうじて流されている屋根の残骸につかまり、近くの家を乾いた服や敷布団を確保、暖を</p>

	<p>取った。津波が落ち着いたのちに家族で合流し、避難所へ向かった。</p> <p>(3) 東日本大震災、津波の被害から得た教訓</p> <p>私が今回の経験を通して一番反省したことは、大津波警報を受けても「自分だけは大丈夫」と避難をしなかったことだ。災害は、場所や人を選ばずやってくる。自分や家族が絶対に被災しないとは限らない。自分の命は自分で守らなければならないのだ。万が一のとき、自分の家族を守りながら地域のためにどういった行動ができるのか、日頃から考えておくことが大切である。また、市の動きとしても、被害範囲が狭かったことから津波が起きたことを知らない職員が多く、市民への対応が遅れるなどの苦情も多く寄せられた。事前の備えと、共有が大切だと学んだ。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
開催地より	<p>講演を聞いて、災害は他人事ではないと感じた。災害が発生したらどうなるかを職員全員で想像して、どういった動きをすればいいか、足りない備蓄はないかなどの確認をしようと思う。</p>